

## 第4章 虐待予防

### 第1節 児童虐待への理解（p68-76）

#### 【虐待の予防と対応等】

##### 1. 子ども虐待

保護者がその監護する児童について行う次に掲げる行為をいう。

身体的虐待（身体・生命の安全の権利侵害）

性的虐待（性的な安全と選択の権利侵害）

ネグレクト（必要なケアを受ける権利の侵害）

心理的虐待（心理的安全と発達の権利侵害） 面前DV・きょうだい差別含む

⇒子どもを守るべき保護者による人権侵害

##### 2. 最近の無意識な育児状況・・・（モバイル機器による弊害）

- 1) 子どもとスキンシップをとらない
- 2) 子どもが泣いているのは気づいていても、ゲームがやめられない
- 3) 子どもに話しかけられても、メールやラインの返信に夢中
- 4) 家族で外食をしても、騒がないようにモバイル機器を与えておく
- 5) 子どもが泣いたりぐずったりすると、モバイル機器にあやしてもらう

↓

生活の世話はできていても、コミュニケーション不足が過度に続く(ネグレクト)

#### ※**マルトリートメント**

「強者である大人から、弱者である子どもへの**不適切な関わり方**」・・・大人の側に加害の意図があるか否かに拘らず、また子どもに目立った傷や精神疾患が見られなくても、行為そのものが不適切なこと

↓

**モバイル機器は不適切な関わりをもたらす**

特に、スキンシップは、子どもの心の発達にとって非常に大きな役割を果たす為、親子のふれあいがあまりにも少ないと、精神的なネグレクトと考えられる

現代では、愛着障がいと診断されないまでも、マルトリートメントが原因で愛着の形成に問題が生じ、対人関係や社会生活に大きな影響を与えるケースが増加している。

### 3. 愛着障がい（反応性愛着障がい）の子どもの姿

- ◆反応性愛着障がい・・・対人関係において回避的
- ◆脱抑制型対人交流障がい・・・見慣れない人にも過度に慣れ慣れしくなる

「安全が脅かされるような体験の時に心を落ち着けるために戻る場所がない状態」



親が子どもに対して虐待やマルトリートメントをしたり、養育者が何度も替わるなどで、安全な場所が用意されていない状態。



愛着が不足した結果として出現するさまざまな症状を総括したもの。

特に、幼児期に受けた過度なマルトリートメントに起因する愛着障がいは、感情制御機能に問題が発生しやすく、うつ病や多動性障がい、解離性障がいなどの重篤な心の病へと移行すると言われている。



脳が過度なストレスによって「物理的」に傷つく

人生の初期段階に親や養育者等、身近な存在から適切なケアと愛情を受けることが脳の健全な発達には必要不可欠。

胎児期・乳幼児期・思春期といった、脳が外部からの影響を受けやすい時期に極度なストレスを感じると、子どもの脳はその苦しみに何とか適応しようとして、自ら変形する（生き延びるための防衛本能）

#### ※子どもの姿

- ◆衝動性が高く、キレやすくなって周囲の人達に乱暴をはたらく
- ◆喜びや達成感を味わう機能が弱くなるせいで、より刺激の強い快楽を求めるようになる
- ◆愛され褒められる経験が少なかった子どもは、自己肯定感や自立を司る機能がうまくはたらかず、抑うつ状態になったり、自傷行為を繰り返すこともある

★ コロラド州の里親研修テキスト「愛着に問題のあるティーンエイジャー」 萩田悦子訳

①「愛着が安定している場合」

安定した愛着を築いた子ども達は、安心感や援助が必要な時には、親や主たる養育者がそばにいて、必要を満たしてくれるという確信を持っている。このような確信があるからこそ、子どもは周りの世界を探索できる。

②「愛着が不適切な場合」－愛着の形成に問題のある状態

不適切な愛着をもつ子ども達（甘やかされて、わがままな子ども）は、親や親族に甘やかされ過ぎ、自分の社会的、心理的欲求を満たすために人を利用し続ける。親はいつも側にいて、子どもが転びかけても親が手を差し伸べるので、子どもは失敗から学ぶことが出来ない。全ての痛みから子どもは親によって守られ、そして欲求が満たされ過ぎる。

③「愛着が不安定な場合」－愛着の形成に問題のある状態

愛着が不安定な子ども達（両面的な愛着をもつ子ども）は、自分の世話をしてくれるために親が側にいてくれるという確信をもてずにいる。事実、主たる養育者の世話の仕方は一定しない。こうした子どもの場合、離れることをひどく不安がり、人にまとわりつき、あまりひとりで周囲の世界を探索しようとしたがらない。愛着が不安定な子どもは、一時的に拒絶を示し、親に側にいて欲しがると一方で、スキンシップや自分に向けられた優しさ、愛情を拒絶すると言う、相反する態度を示す。

④「愛着が皆無である場合」－愛着障がい（DSM- IV-TRレベル）

愛着が皆無な子ども達（回避型の愛着を持つ子ども）は、愛着による結びつきを築く過程で喪失感を味わっているため、一番難しいケース。欲求を示しても、それに対する養育者からの反応はなく、あったとしてもまれ。こうして育った子どもは何度となく親からの拒絶に合い、その結果主たる養育者の欠如、深刻な疾患、無視と放置といった乳幼児期の発育にまつわるトラウマ（精神的外傷）が癒されず、苦しむ結果となることが多い。

※愛着障がいの子どもの行動パターン

アイコンタクトの乏しさ・多動性・慢性的な不安・嘘、無意味な嘘・見境なく示す愛情・人の目を欺く・表面的な魅力・攻撃性・欲求の過剰な自己充足・判断力の乏しさ・学習困難・引きこもり・良心の未発達・非論理的思考・社交性の乏しさ・動物や人に対する残虐性・主導権争い（権力問題）・暴力や破壊的なこと（怪物、血、火）に対する異常な関心・食物を隠す、または食習慣に問題がある（特に糖分の取りすぎ）

★5歳頃までに、何らかのマルトリートメントを継続して受け続けると、76%の人が愛着障がいを起こす

(van der Kolk .B.A 2003：友田明美 「子どもの脳を傷つける親たち」NHK 出版 2017)

#### 4. 子ども虐待のリスク

- 1) 親が子ども時代に大人から愛情を受けていなかった
- 2) 生活にストレス（経済不安や夫婦不和、育児負担等）
- 3) 社会的に孤立し、援助者がいない
- 4) 親にとって意に沿わない子（望まぬ妊娠、育てにくい子、愛着形成阻害等）

これらの4つの要素がそろっていること ⇒ 虐待の発生となる

（健やか親子 21 検討会報告書）

#### 5. 虐待経験の思春期への影響

- 1) うつ状態
- 2) PTSD過覚醒
- 3) 衝動性一切れやすい
- 4) 気分易変—気分がコロコロ変わる
- 5) 被害念慮—自分だけが愛されていないと思う
- 6) 非行
- 7) 家庭内暴力
- 8) 学校不適應
- 9) 薬物乱用

#### 6. 虐待経験の大人への影響

- 1) 小さい時に虐待を受けると「鬱病」になりやすい
- 2) PTSD—フラッシュバック
- 3) 多重人格
- 4) 境界性人格障害—ストーカー(怒りを爆発しやすく他人との安定した関係不可)

脳に刻まれる「癒されない傷」(福井大学大学院・友田明美)

身体的な経験を通して発達していく中で、虐待という激しいストレスの衝撃により、子どもの脳には癒されない傷ができてしまう—脳の発達に影響を及ぼす

虐待は子ども時代だけでは終わらずに大人になっても影響する。ストレスホルモンが脳の発達を遅らせる⇒情動の中心である扁桃体が過剰に興奮し、副腎皮質からの大量のストレスホルモン（コルチゾル）が放出⇒脳の発達にダメージ

- 1) 海馬（楽しい・辛い・悲しい等思い出を溜めておく場所）の発達は3～4歳
- 2) 脳梁（右と左の情報連絡・統合）敏感期は、8～10歳
- 3) 前頭前野（心）の敏感期は13～15歳⇒いじめを受けると自殺に移行しやすい

#### 7. 虐待を受けて育つ子どもの発達行動変容

幼児期（反応性愛着障害）⇒学童期（多動障害と破壊的行動障害）⇒思春期（PTSD）⇒青年期（解離性障害および行為障害）⇒成人期（複雑性心的外傷後ストレス障害＝犯罪行動を引き起こす）

#### 8. 早期発見のための、保育所用チェック項目

##### 気になる子ども

##### A 乳児

- 語りかけに対しても表情が乏しい、笑わない／視線が合わない
- 体重増加が不良
- 母子健康手帳の記入が少ない
- お尻がただれている。前日のままの服装で登園する
- 清潔感がなく、いつもすっぱい匂いがする
- おびえた泣き方、抱かれると異常に離れたがらず、不安定な状態が続く

##### B 幼児

- 雰囲気暗く、喜怒哀楽の表情を表さない／表情が動かない／自分の世界にのみ
- 親が迎えにきてても無視して帰りがたらない
- 給食で過食、お替わりを繰り返す
- 家庭でのけがを保育者が聞くまで言わない
- 基本的な生活習慣が身につけていない
- 身体も衣服も清潔でない
- 友だちを求めない、遊び方を知らない

##### 気になる親

- 表情がかたい／語りかけをしない
- 乳児の扱い方がハラハラするほどに乱暴である
- イライラし、よく怒る
- 親のリズムで行動し、乳児のペースを無視する
- 病気になると不満を口にする
- 理由をつけては長時間、園に置きたがる
- 「可愛いと思わない」「この子は欲しくなかった」等と公言する

- 母親が精神疾患で入退院を繰り返したり、躁鬱的で不安定である
- 服装が急に変わる／よくしゃべる等の症状がなる

#### 気になる雰囲気

- 保育者に家庭の状況を話したがない
- 子どもへの働きかけがなく、園でどう過ごしたか気にかけない
- 自分の子を他児と比較ばかりする
- 理由をつけては園の行事を欠席し、ベビーシッターを事あるごとに利用する
- 子どもの発達遅滞に気づかない

#### 【虐待の事例分析】

脳に刻まれる「癒されない傷」（友田明美）

身体的な経験を通して行く中で、虐待という激しいストレスの衝撃により、子どもの脳には癒されない傷ができてしまう—脳の発達に影響を及ぼす

#### 5歳児の脳を損傷させた「DV夫婦」の末路

トラウマを抱えた子どもの守り方

政治・社会 2017.10.28

小児精神科医 友田 明美      PRESIDENT Online

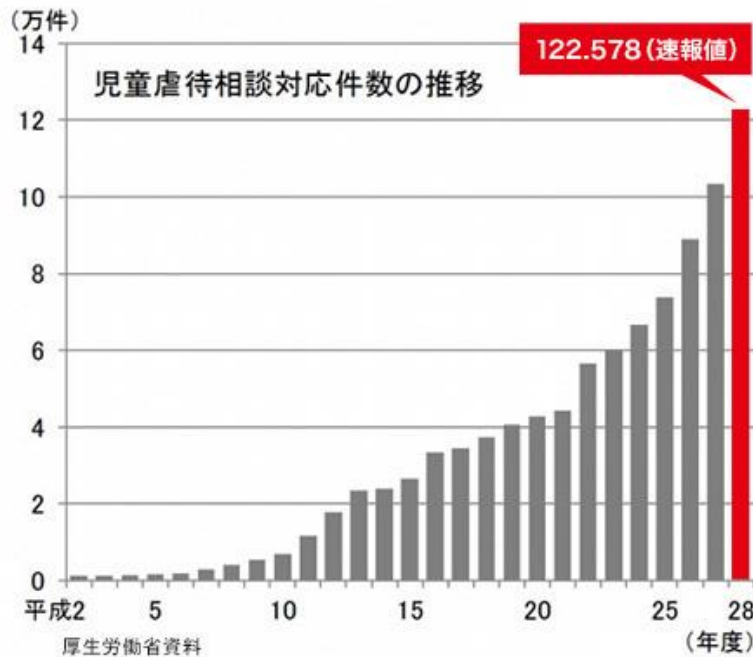
虐待は子どもの脳を萎縮させ、学習意欲の低下やうつ病などの原因になる。だが、夫婦喧嘩など、子ども自身に向けられた暴言や暴力ではなくても、ストレスホルモンによって脳神経の発達が阻害されることがわかってきた。小児精神科医の友田明美氏が、ある夫婦の実例を通じて警鐘を鳴らす——。

※以下は友田明美『子どもの脳を傷つける親たち』（NHK 出版新書）を再編集したものです。

#### 「不適切な養育」で損傷する子どもの脳

厚生労働省によると昨年度、児童相談所に寄せられた「児童虐待に関する相談件数」は、過去最多の12万件（速報値）を超えた。「虐待なんて、自分にも家族にも関係ない」と思っているかもしれない。しかし、児童虐待防止法の第二条「児童虐待の定義」には「児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力」と書かれている。つまり子

どもの前で繰り広げられる激しい夫婦喧嘩は「児童虐待」とみなされるのだ。



この30年、わたしは小児精神科医として、脳科学の側面から子どもの脳の発達に関する臨床研究を続けてきた。その結果、「チャイルド・マルトリートメント（不適切な養育）」によって、子どもの脳機能に悪影響がおよんだとき、生来的な要因で起こると考えられてきた学習意欲の低下や非行、うつ病や摂食障害、統合失調症などの病を引き起こす、または悪化させる可能性があることが明らかになったのだ。

#### 「チャイルド・マルトリートメント（不適切な養育）」

maltreatment（マルトリートメント）とは、mal（悪い）と treatment（扱い）が組み合わさった単語で、前述のとおり、「不適切な養育」と訳される。「虐待」とほぼ同義だが、子どもの健全な成長・発達を阻む行為をすべて含んだ呼称で、大人の側に加害の意図があるか否かにかかわらず、また子どもに目立った傷や性疾患が見られなくても、行為そのものが不適切であれば、すべて「マルトリートメント」とみなす。わたしが研究や臨床の現場で、マルトリートメントという言葉を使っているのは、虐待という言葉では日常にひそむ子どもを傷つける広範な事例をカバーしきれないと考えるからだ。また、懸命に子育てをしている親に対して「虐待をしている」とレッテルをはることにより、親の人格を否定してしまったら、彼らの育て直しのチャンスを奪うことにつながってしまうからだ。

子どもと接するなかで、マルトリートメントがない家庭など存在しない。ふたりの娘をもつわたし自身も、数々の失敗を経験してきた。親になった瞬間から完璧な親子関係を築ける人などいるはずがなく、トライ&エラーを繰り返しながら、徐々に子どもの信頼を得ることができるようになるものだ。

しかし、子育てに懸命になるがあまり、知らず知らずのうちに子どものことを傷つける行為をしている場合がある。マルトリートメントは強度と頻度を増したとき、子

どもの脳は確実に損傷していく。この事実をわれわれ大人は見逃してはいけない。

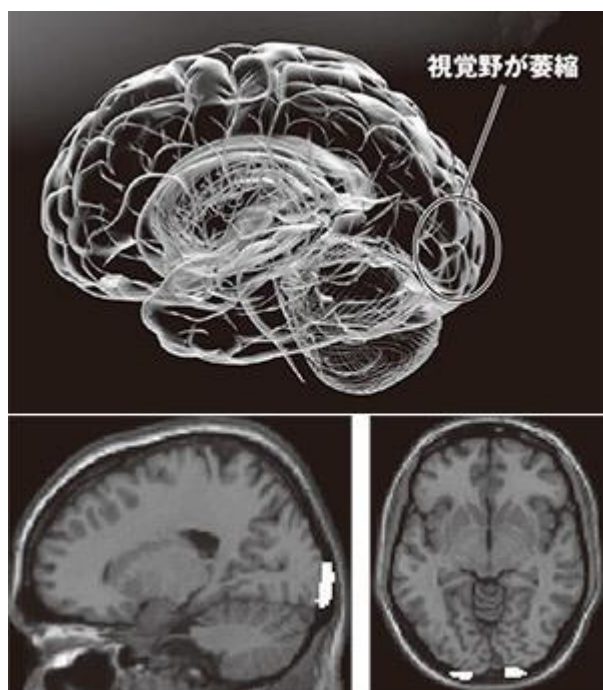
### 子どもの前で繰り返される母親へのDV

サヤカさん（仮名・35歳）は結婚後、エスカレートしていった夫による暴言・暴力に悩んでいた。機嫌を損ねると「なんでお前は何もできないんだ」「もっとまともなものを食べろ」と彼女をなじり、頬をなぐり、物を壁に投げつけては破壊した。妊娠後もその行為は止むことなく、マミちゃん（仮名）が生まれてからも、夫は幼子の前で容赦なくサヤカさんを罵倒し、手をあげた。

こんな屈辱的な日々を送っていたサヤカさんにとって唯一の救いであったマミちゃんは、成長するにつれ夫の口調や表情を真似するようになった。「このままでは娘まで憎くなって、何かしてしまうのでは」という危機感に襲われ、わたしが勤務する福井大学医学部附属病院の「子どものこころ診療部」を母娘で訪れた。当時、サヤカさんは睡眠障害や食欲不振に悩まされていたが、同時にマミちゃんにも異変が表れ始めた。オムツがとれて久しかったが、日中遺尿（おもらし）をすることが増え、夜中に突然何かに怯えて泣き出し、寝付けなくなることが多くなった。

### DV目撃でなぜ視覚野は萎縮するのか

わたしがハーバード大学との共同で行った研究によると、子ども時代にDVを目撃して育った人は、**脳の「視覚野」の一部で、夢や単語の認知などに関係した「舌状回（ぜつじょうかい）」と呼ばれる部分の容積が、正常な脳と比べ、平均しておよそ6%萎縮していた。**これは無意識下の適応とも考えられる。つまり、生き延びるために、脳はその形を自ら変えるのだ。**視覚野が萎縮すると会話をする相手の表情が読み取れなくなり、コミュニケーションをとるさいに支障が出てしまう。**子どもにとって大問題だ。



（上）面前DVによるマルトリートメントの脳への影響（下）白い部分は容積の減少



が見られた視覚野の一部（写真提供＝友田明美氏）

このように子ども自身に向けられた暴言や暴力でなくても、激しいいさかいを目撃することにより、体内にはストレスホルモンが分泌され、脳神経の発達に阻害されるのだ。

想像してみてください。子どもにとって大事な存在である両親が目の前で言い争っている。例えば、父親が母親を頻繁に怒鳴りつけ、母親が父親の悪口を常に言い続けているような環境で、子どもが健やかに育つはずがない。

夫婦喧嘩と侮るなかれ。このような状況が継続される場合、子どもを一刻も早くマルトリートメントがある状況から救い出し、安心して暮らせる環境を整える必要がある。

### トラウマを抱えた子どもをどう守るか

わたしが医師として勤める「子どものこころ診療部」は18歳までの子どものこころと身体の発達に関する診断と治療を行っている。このような診療所が国内には少ないため、全国から人が訪れ、いつも予約でいっぱい。海外からの受診者もいる。

夫のDVで悩んでいたサヤカさんもマミちゃん（現在5歳）といっしょに通院している。マミちゃんにはおもちゃを使った心理治療を継続的に続け、母親にもEMDRと呼ぶ眼球運動によるトラウマ治療をほどこしていった。その結果、マミちゃんの症状は少しずつ改善し、現在では夜中に怖がって泣き出ししたりすることはなくなり、感情の起伏も落ち着きを見せている。サヤカさんもマミちゃんに穏やかに接することができるようになったという。

現在、サヤカさんは夫と別居し、離婚調停中だ。夫婦が別れて暮らせば結果としてDV問題は解消するが、それでマミちゃんの発達を阻害する不安要素がすべて取り除かれるわけではない。

仮にDVを行っていた父親と離れて暮らしていても、目撃の記憶が原因となってフラッシュバックが起きるため、マミちゃんにはいまは安全だということを根気よく理解させ、安心して生活できるように手厚くケアをしていくことが必要になる。

### 加害親との同居や面会は避けたほうがいい

このような夫婦間のDVの問題では、親が単身になればDVもなくなるのだから、加害側の親と子どもを同居させたり、面会させたりしてもよいのでは？ と考える人もいるが、それは早計だ。配偶者に対してDVを行う人は、子どもへのマルトリートメントを行う傾向も強いいため、暴力の対象が、配偶者から子どもへと移る可能性が高いからだ。

たとえ子どもへのマルトリートメントがなくとも、加害親との生活や面会自体、子どもにとっては新たなストレスとなる可能性がある。先に述べたようなフラッシュバックも起こりやすくなり、その結果、子どもに再び身体的・心理的な不安が生じ、脳の発達をも阻害することにつながる点を見逃してはいけない。

また、加害側の親と対面することで、被害を受けていた親のほうが精神的に不安定に

なり、それが子どもに影響を与えてしまうというリスクも考えられる。

### 必要とされる親へのサポート

幼いころに受け続けたマルトリートメントは、脳の成長が著しい時期であるがゆえ、ことさら深刻なダメージを脳に与え、その後、長期にわたって被害者の生活を脅かしていく。幸いにして現在のところ重篤な症状には陥っているようには見えないサヤカちゃんの場合も、時間をかけた長期的な治療と支援が必要なケースだといえる。

また、親に対するケアという観点では、現在、こうしたマルトリートメント家庭の情報を、社会福祉関連の機関や市区町村の相談センターなどとも広く共有し、養育者支援へとつなげていくことが非常に重要になってきている。

必ずそうだというわけではないが、親もまた幼少時代、不適切な養育環境を必死に生きぬいてきた被害者である可能性もあるからだ。マルトリートメントの連鎖をなんとかして断ち切る必要がある。

周囲の支援者は、こうした親たちに対して、「子どもだった過去」から「親になった現在」に至るまでの経緯——つまり、被害者から加害者へと変わらざるを得なかった道筋——や、現在のこころのありようについて、深く理解していく必要がある。

親の状況も改善し、必要であれば治療を行うといった養育者支援が、結果として、子どもの健やかな成長・発達につながっていくはずだ。

### 子どもを守るのは、大人の仕事である

わたしは著書『子どもの脳を傷つける親たち』（NHK 出版新書）のなかで、これまで長年行ってきた脳科学から子どもの発達を見つめるという研究内容を、医学書としてではなく、一般の人たちに知ってもらうために上梓した。



友田明美『子どもの脳を傷つける親たち』（NHK 出版新書）

子どもの脳が損傷すると聞いて驚かない人はいないと思うが、そう慌てることはない。成長過程にある子どもの脳はレジリエンス（回復力）をもっているからだ。本書のなかでは、脳科学から明らかになった最新の知見に加え、その傷つきから子どもを守る方途と、健全なこころの発達に不可欠な愛着形成の重要性について著した。

マルトリートメントは、決して「特殊な人たちが」「特殊な環境で」行っている「非日常的な出来事」ではない。日常のなかにも存在し、習慣化されていることも多い。このことを子どもに接するすべての人に知ってほしい。

子どもが不必要な傷つきで、その人生を台無しにすることがないように、彼らを守るのはわたしたち大人の仕事である。

### ★ブレイクアウトルーム4-1（15分）

講義を受けて、なぜ児童虐待予防が必要なのか。改めて理解したポイントについて根拠を踏まえて話し合ってください。

## 第2節 児童虐待を受けたと思われる児童への支援（p77-84）

### 事例1 3歳児クラス（男児）

子どもが求める愛情と親からの愛情表現にずれがあり、子どもが満足できていないのではないかと感じます。そのため、家庭で満たされない気持ちを園で爆発させているように感じる姿があります。子どもはもっと親との時間やスキンシップを求めています。親は玩具や服を買うことで愛情表現をしています。親の愛情表現が不器用なのかもしれません。親は自分の生活や仕事、プライベート（パートナーのこと）が子どもより生活の中心となっています。他の兄弟の行事や誕生日のイベントしかしらないなど、兄弟での関わりに差があります。A君や保護者にどのように関わっていったら良いでしょうか。

### 事例2 5歳児クラス（男児）

保護者の過度な干渉により、子どもを困らせてしまい、愛着というより依存関係に近い子どもがいます。対象児は1歳から入園していますが、活動をするにあたり、経験不足も関係しているのか、常に不安な表情を浮かべています。子どものそばで見守りつつ、活動にスムーズに入れるよう、援助しているのですが、「できた！」という達成感を子どもが感じているのか、出来たことにより自信につながっているのか心配です。就学前ですが、毎日継続して登園することも難しく、日々の活動の経験不足にもなっているため、毎日登園出来ればよいのかなと思っているので、保護者にどのような働きかけをすればよいのか悩んでいます。

★ブレイクアートルーム4-2（15分）

事例1・事例2について適切な関わりについて話し合ってください。

虐待資料

1. 令和2年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数（速報値）
  - 児童相談所での児童虐待相談対応件数とその推移・・・・・・・・・・・・ 1頁
  - 児童相談所での児童虐待相談対応件数（対前年度比較、都道府県別）・・・・ 2頁
  - 児童相談所での月別の児童虐待相談対応件数（対前年比較）・・・・・・ 3頁
  - 児童相談所での虐待相談の内容別件数の推移・・・・・・・・・・・・・・ 4頁
  - 児童相談所での虐待相談の経路別件数の推移・・・・・・・・・・・・・・ 5頁
2. DV対応と児童虐待対応の連携の取組・・・・P3
3. 2021年度児童相談所所長研修〈前期〉 児童家庭福祉の動向と課題・P61・P158

貧困資料

- 2019 国民生活基礎調査の概況 厚生労働省 令和2年7月17日
- Ⅱ 各種世帯の所得等の状況
    - 6 貧困立の状況
    - 7 生活意識の状況